

2020
秀作

第53回「おかねの作文」コンクール

お金に隠された気持ち

福岡県・福岡市立東住吉中学校 1年 神宮 あい

「あいちゃん、よく頑張ったねえ。はい、ご褒美どうぞ。」

そう言われてもらう、おばあちゃんからのお小遣い。いくら中学生になったとはいえ、ここは素直に嬉しい。

「そういえば、あそこのタピオカドリンク美味しいけど高い。今なら買えるな」とか、「『鬼滅の刃』の最新刊が買えるな」など、色々買えるものを頭の中で想像して並べてみる。優先順位を瞬時に立てられる、私の得意技だ。だけど、ここでいつも問題が起こる。いざ買おうとお店に行くと、躊躇してしまう。あれもこれも欲しいというわけではない。これ、と決めて好きなものだけ気に入ったものだけ買おうとしているのに、買う前から後悔すると思ってしまう。結局、私は何も手に持たずお店を出てくる。いつもその繰り返しをしながら、2、3ヶ月迷いに迷って、やっと買う。それは、今私の宝物のシャープペンシル。

私の伯父は料理人で、自分で店を経営している。私はこの休校中に、アルバイトをする機会が巡ってきた。といっても、伯父のようにお客様に出せるような料理が出来るわけではないので、お店のメニューを書いて並べた。そのメニュー表には、様々なイラストを描いて、伯父が一押ししている料理には、「おすすめですよ！」とコメントと一緒に載せてみた。また、店の前に置く看板にもランチメニューやイラストを描いて、他のお店より目立つように自分なりに考えてやってみた。

そうすると、看板を見て入ってきたお客さんから、

「あの絵かわいいね。」

「このメニュー表、見やすくできてるよ。」

と気付いてくれる人もいた。お客さんの中には、帰り際に私に、

「ありがとう。美味しかったよ。」

と伝えてくれる人もいて、嬉しさで胸がいっぱいになった。

伯父は、朝早くから市場に買い出しに行き、ランチの仕込み、仕出し弁当の仕込み、夜の営業の準備と休む間もなく働いている。見ていると大変な仕事だな、と思うけれど、毎日お客さんからの美味しい、また来るね、という言葉が聞けることがやりがいになって、また明日も働けるのだな、と思った。

「素敵なメニューとイラスト作ってくれてありがとう」と伯父は言い、アルバイト代だよと言ってお小遣いをくれた。

帰り道、私の欲しいものの優先順位表を考えていると、喉が渇いて、コンビニに寄った。もらったばかりのアルバイト代でジュースを買った。一度飲んだことのある味だったけれど、美味しく感激した。その時に、私はふと考えた。「少しでも役に立てるようにと、自分で出来ることを考えて働いて、その対価としてもらったアルバイト代は比較的すぐ使えた。それなのに、おばあちゃんにももらったお小遣いは、何ヶ月も迷って使った。同じお金なのに、使う時にどうしてこうも違うのだろう。」

おばあちゃんの生活に目を向けて見ると、おばあちゃんは年金生活。2ヶ月に1回年金が入る。今、おばあちゃんは施設で暮らしているから、その施設に支払うお金と病院、薬代など諸々をその年金で賄っている。私にご褒美といって渡してくれるお小遣いもその中からだ。

人は働いて、その対価として収入を得ることが出来る。働いている父母になぜ働くのか？と質問すると、家族との生活のため、自分のため、社会のため、と話す。たしかに収入がないとたちまち困ってしまう。でも、大人が働く理由は、それだけではなさそうだ。自分の存在価値を得るためだったり、誰かのために役に立ちたい、という気持ちのほうが大きいように見える。

振り返ると、私は、お金の「額」ではなく、おばあちゃんの「気持ちの大きさ」が嬉しかったのだ。「頑張ったね」というおばあちゃんのことを際立たせる付属品、つまりおまけのようなものが「お金」だったのだ。

